

第3課 あなたの世界が危機に直面するとき

【暗唱聖句】

「信じなければ、あなたがたは確かにされない。」イザヤ 7:9

【日曜日・北の脅威】

「しかし、アラムがエフライムと同盟したという知らせは、ダビデの家に伝えられ、王の心も民の心も、森の木々が風に揺れ動くように動揺した」イザヤ 7:2

7章は、紀元前735年のシリア・エフライム戦争を背景とした物語である。アラム人（シリア）と12部族の一つエフライム人（北イスラエル）は、アッシリアに対抗するために同盟を結んだ。これを聞きつけ、アハズ王も民も激しく動揺する。それは、彼らが『ユダに攻め上ってユダを脅かし、アッシリアとの戦いのために従わせ』（イザヤ 7:6）ようとするのではないかと思ったからだ。恐怖に陥った王は、神を忘れて、何と敵の敵すなわちアッシリアの王に助けを求めるのだった。

「アハズはアッシリアの王ティグラト・ピレセルに使者を遣わして言させた。「わたしはあなたの僕、あなたの子です。どうか上って来て、わたしに立ち向かうアラムの王とイスラエルの王の手から、わたしを救い出してください。アハズはまた主の神殿と王宮の宝物庫にある銀と金を取り出し、アッシリアの王に贈り物として送った。」列王記下 16:7

アッシリアはシリアを攻める口実を得て、直ちにそれを実行した。ユダはこれにより救われたかに思われた。

【月曜日・妨害の企て】

このような状況の中で、神はイザヤにアハズに会うように言われる。その際に息子のシェアル・ヤシュブも連れて行くように指示される。シェアル・ヤシュブという名には、「残りの者は帰ってくる」という預言的な意味があった。それゆえ、アハズはイザヤが息子を連れてきたのを見て、アッシリアに責められて捕囚となることを神が語っており、残された者だけが帰ってくることになるかと悟ったことだろう。帰ってくるとは、悔い改めるという意味もあった。

「彼に言いなさい。落ち着いて、静かにしていなさい。恐れることはない」イザヤ 7:4

「静か」（ルーへ）という言葉は、神の現臨の中で神に信頼することによって得られる概念である。戦いは神の御前でなされ、敵は既に神の手中にある。だから信頼せよということ。真に恐るべきは人ではなく神であり、神の目にはアラムもエフライムも「燃え残っているくすぶる切り株」（4節）に過ぎないのである。彼らの企みは成就しないとはっきり告げた上で、主は次のように言われた。

「信じなければ、あなたがたは確かにされない。」イザヤ 7:9

信じることと、確かにされることは元々同じ語源から来ている。私たちは、主を信じることによって、恐れが取り除かれて確かにされるのである。

【火曜日・新たな機会】

「主なるあなたの神に、しるしを求めよ。深く陰府の方に、あるいは高く天の方に。」イザヤ 7:11

主は、アハズに対して「あなたの神」と彼への親近感を示し、しるしを求めよと言われた。本来ただ信ずべきものを、しるしを求めて良いとは、驚くべき寛大な招きである。しるしとは何か。それはインマヌエル・神は共におられるとがわかること（もの）である。しかし、アハズは「わたしは求めない。主を試すようなことはしない」と拒否する。外面的には敬虔に見えるが、実はそれは不信仰を現わしていた。そのことは、「わたしは求めない」

という言葉の中にも現れている。原語では「主を」という言葉があるのだが省略されている。アハズは「わたしは主を求めない」と言っているのである。神の招きを拒むことは、「神に、もどかしい思いをさせる」(イザヤ 9:13) ことに他ならないのであった。ところで、アハズが主の招きを拒んだときに、イザヤは「わたしの神を、もどかしい思いにさせている」と言った。「あなたの神にしるしを求めよ」言われたアハズだったが、イザヤのように「わたしの神」とはなっていなかった、つまりしっかりとした個人的な環形が築かれていなかったということだ。

【水曜日・男の子のしるし】

アハズが求めるべきしるしとは何だったのか。それはインマヌエル・神が共におられるとわかること（もの）のこと。これが求めるべきしるしであることが、14 節の言葉を見ればわかる。アハズがしるしを求めることを拒否するので、神自らがしるしを与えられたのだ。

「それゆえ、わたしの主が御自らあなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ」イザヤ 7:14

有名なイエス様がお生まれになる預言である。この有名な預言は、実はこのような場面で語られた預言なのである。イエス様がお生まれになることは、インマヌエル・主が私たちと共にいてくださるというしるしでもあったのだ。それは求めても良い、あるいは求めるべきものだった。アハズがそれを拒否したことによって、神はそれをもどかしく思われ、このように言われたのであるが、イエス・キリストは、主がいつも共にいて下さるということの私たちにとってもしるしである。

【木曜日・神われらと共にいます】

インマヌエルとは、神われらと共にいますという意味である。これは繰り返し語られる慰めと希望に満ちたメッセージでもある。

「死の陰の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる」詩篇 23:4

「水の中を通るときも、わたしはあなたと共にいる。大河の中を通っても、あなたは押し流されない」イザヤ 43:2

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」マタイ 28:20

このようにいつも、主は共にいて下さると語り、私たちに励ましてくださるのである。十字架でイエス様と一緒に磔にされた犯罪人に対してでさえ、共にいて下さったのである。主が共にいて下さることがわかれば、不安も恐れも消えてしまう。逆にわからないと不安に襲われ、この世のものに頼ろうとする。常にこの点を意識することは、信仰のバロメーターとなる。